

Title	京大上海センターニュースレター 第251号
Author(s)	
Citation	京大上海センターニュースレター (2009), 251
Issue Date	2009-02-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/71036">http://hdl.handle.net/2433/71036</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

---

# 京大上海センターニュースレター

第 251 号 2009 年 2 月 2 日

京都大学経済学研究科上海センター

---

## 目次

上海センター学術セミナー「中国農業:持続的発展への諸課題」のご案内

ネパールにおける「チベット難民」について

長征とチベット暴動:第3回現地調査報告

+++++

## 上海センター学術セミナー

### 「中国農業:持続的発展への諸課題」のご案内

京都大学上海センターでは昨年度に続き、中国の農業問題についての以下のような学術セミナーを計画しました。「三農問題」といわれる現代の農業問題とともに、中国農業史の長い歴史を振り返る部分も含んだものとなっています。我々と学術協定を結ぶ中国人民大学と西安交通大学から 2 名ずつの専門家をお呼びして開催するものです。参加費は無料ですので、多くの参加を期待します。また、上海センター協力会の後援もいただきます。記して感謝いたします。なお、本事業は現代中国地域研究京大拠点の事業の一環として行なわれます。

会場はすべて京都大学経済学研究科 2F 大会議室です。

#### 第 1 セッション 2009 年 2 月 16 日(月) 午前 10:00-12:00

山本裕美(京都大学教授) 日中農業政策の比較  
高德歩(中国人民大学教授) 農村自治:古代と現代の比較

#### 第 2 セッション 2009 年 2 月 16 日(月) 午後 1:30-6:00

張思鋒(西安交通大学教授) 農村人口都市移住の問題について  
張 勝(西安交通大学准教授) 農民生産技術を革新する新しい農村金融メカニズムの構想  
胡 霞(中国人民大学准教授) 中国農業成長段階の変化と発展方向  
沈金虎(京都大学講師) 家族経営体制、経済発展と草原地域の砂漠化  
- 中国草原地域の砂漠化の原因と今後の対策について -

#### レセプション 2009 年 2 月 16 日(月) 午後 6:00

於 カンフォーラ(京大正門横)

#### 第 3 セッション 2009 年 2 月 17 日(火) 午前 10:00-12:30

大西広(京都大学教授) 中国農業史研究におけるチベット農奴制研究の意義について  
安部治平(青海民族学院講師) アムド=チベットの土地家畜所有について  
宮崎卓(京都大学准教授) 中国農業に対する日本の支援問題について

+++++

## ネパールにおける「チベット難民」について

京都大学経済学研究科教授

上海センター副センター長 大西 広

年末年始にネパールに行き来した。マオイストを中心とする新政府の実態を知るのがそのひとつの目的であったが、もうひとつにはネパールにいる「チベット難民」の実態を知りたいということもあった。したがって、現地ではそうした「難民キャンプ」や彼らの経営する多くの商店やチベット仏教寺院を訪問し、さらに水野日本大使と邱中国大使にも会見することができた(この二人の大使との会見には上海センター協力会の大森副会長にお世話になった。邱大使は前々大阪総領事時代に私も何度かお会いしている)。以下では、その地でこの「チベット難民」について考えたことを述べてみたい。

それで、その「チベット難民」であるが、まずは彼らがこの地で非常に活発に経済活動をしているということが紹介できる。チベット自治区では漢族の進出が激しく経済的に押され気味の彼らもこの地では逆転して現地ネパール人を押しのけて土産物屋やレストランを数多く出し、チベット仏教寺院周辺や「難民キャンプ」周辺、さらには観光客の集まるその他の観光地にも相当目立っている。私の主な問題関心は伝統経済下にある農牧民はどのようにして企業家になるか、ということにあるので率直に喜んだというのが実際である。中国国内のチベット族地区についても、実は別稿(「ラサ暴動の真実とチベット問題再論」『季刊中国』第95号、2008年)で述べたようにチベット族企業家は主に他民族と接触するその周辺地区から成長してきている。そして、この「ネパール」という地も周辺地区に違いがないから、この理論はここでも当てはまっている。民族の交流の重要性を改めて認識した。

しかし、それでも、そうして諸民族が互いに刺激し合うということは、紛争の原因にもなる。昨年のラサ暴動の直後、それに呼応した「チベット難民」のデモがカトマンズ市内で発生し、それが現地警察によって弾圧されている様子が全世界に流されたが、この背景にはネパール人に彼らが嫌われているという事情もあるようである。現地のネパール人は異句同音に「チベット難民」のことを悪く言い、「あんなものは難民でも何でもなし」という。たとえば、ネパール人の作った絨毯の三倍の値段でチベット人は絨毯を売る、ということである。そして、実際、カトマンズの南に隣接するパタンという町の「難民キャンプ」の大きな建物にはこの工場となっていて、欧米人が買いに集まっていた。チベット自治区ではチベット族が漢族にその経済的利益を奪われていると感じているが、ここネパールではネパール人がチベット人にその経済的利益を奪われていると感じている。皮肉なものである。

もうひとつ、この関連でバクタプルというカトマンズ近郊の古都での興味ある体験も紹介しておきたい。それは、この旧王宮周辺でアルバイトのガイドを雇ったところ「チベット難民」がタンカと呼ばれる仏教画の店に連れられ、そこで「この絵の図案はダライラマが作ったものである。そのため売上げの15%はダラムサラのチベット亡命政府に支払われる」という説明を受けたことである。同行した私の家内の判断はそれは嘘だろうというものであったが、嘘か本当かは別として、こういうと外国人がよく買うということであろう。ネパール人が「ネパール人の作った絨毯の三倍の値段でチベット人は絨毯を売る」ということもこれでよく理解できる。この説明が彼らの付加価値となっており、かつまたそうしてネパール人のマーケットが浸食されている。この地におけるチベット族の商魂は相当たくましい。

しかし、ここまで商魂逞しくなると、この原因は「他民族との接触によってそうなった」とは言えないかも知れない。ここでの「他民族」はネパール人であり、彼らとの接触が彼らをそうしたという方式では彼らを追い越すまでに商魂逞しくなることが説明しにくいからである。そして、もしそうすると、ここでありうる「追加的説明」とは、そもそも企業家精神に逞しいチベット族がここに「難民」としてやって来ている、というものであろう。彼らは当初1959年のダライラマの亡命時に連れ添った者たちであるから、当然農奴主や貴族が多かる。無知な農奴たちではなく、そうした「文明化」された社会階層がこの地に移動しているとなると当然企業家としての成長はありうる。これはひとつの可能性である。

が、まったく別の視点から、彼らのこの地における生活基盤の無さがそうしたのだとの説明もありえよう。私が見た「難民キャンプ」は上記のパタンのものだけではなく、カトマンズから西へ200km行ったボカラという農村部のものもある(これは付近の丘の上から眺めた)が、その地区に住居が集中している理由は土地を持たないからであると思われる。農村であるから大部分のネパール人は農民ではあるが、この地のチベット族は農業以外で生計を営まねばならない。そして、もしそうすると観光客相手の土産物屋やレストラン、あるいは先のような仏教画描きとなろう。つまり、やむなく「企業家」にさせられたという仮説である。

この冬、私は学生の卒論審査でマルサスの『人口論』を学ぶ機会を得たが、マルサスはその著書の中で「貧しさ

こそが人間を発達させる」というような「反動的」なことも言っている。これは当時の進歩的な人々から当然に反発を得たものであるが、私には分からないわけではない。資本主義に適合した人格の形成がどのような条件によって行なわれるか、を考えると、これは実際に意味ある意見でもある。逆に言うと、チベット自治区におけるチベット族たちが「補助金漬け」にされても良いのかどうかという問題である。

問題の多い資本主義ではあっても、それがまだ必要とされているところでの政策は様々に配慮されたものでなければならない。

以上

## 長征とチベット暴動:第3回現地調査報告

01.FEB.09

小島正憲

今回の内容： 1.チベット暴動 2.長征とチベット族 3.長征への新視点 4.上海の西藏展

08年3月のチベット暴動のラサ市内の状況については、大木崇氏の労作「実録チベット暴動」(かもがわ出版刊)において、その真実の一面が明らかにされた。しかしラサ市以外の地域における実状については不明のままである。08年10月、私は青海・四川・甘肅の3省の暴動跡をたどってみた。また毛沢東率いる労農紅軍も長征時に近接した地点を行軍しているの、その当時のチベット族との関係も調査してみた。

### 1.ラサ市以外のチベット族暴動の実態(2008年10月時点での調査結果)。

マスコミでは、08年3月、ラサ以外の地でも暴動が同時多発したと報道された。今回(08年10月)私は、青海・甘肅・四川と3省に渡って歩き、下記 ~ の場所を調査した。それらの市や県、鎮に通じる道路には武装警察によるバリケードが築かれており、それらの地は厳重な警戒下に置かれていた。これだけでもこれらの地に暴動が起きたということが十分に推測できた。これらの地で規模の大小はあるが暴動が起き、鎮圧されたことは事実であった。またすべての地に立派なラマ教寺院が建立されていたが、ほとんどが文化大革命で破壊され、近年になって再建されたものであり、それを語る僧侶や信者の顔からは強い無念さを感じることができた。





#### 青海省黄南藏族自治州:同仁県

人口は8万人。構成はチベット族が72%以上、回族10%、その他。この県はラマ教の隆務寺を中心にしてチベット文化を色濃く残している。08年2月の旧正月のときに、夜店で回族の子供が風船を割ったというような小さな事件を発端に、2000人規模のチベット人の暴動に発展。他県からの警察も駆けつけてようやく沈静化。10人前後の行方不明者あり。その後、9月まで相当数の警察が市内の警戒を続行した。なお隆務寺の中の本尊の裏側には、堂々とダライ・ラマ14世の大きな写真が飾ってあった。



#### 甘肅省甘南藏族自治州:夏河県

人口8万人。チベット族多数。町に入る道路には、武装警察のバリケードが築かれていたため、その前で警察の点検を受けた後、バリケードをS字に迂回しながら町に入った。夏河県にはラマ教の拉布楞寺があり、かつては僧が数千人修行していたという。07年、ダライ・ラマ14世が米国議会からゴールドメダルを受賞したときに、僧侶が花火を打ち上げ祝ったため、警官隊と衝突し死者が出たという。3月の時点で、5000人ほどの僧侶が他の寺院などに分散させられ、今でもその状態が続行中だという。

#### 甘肅省甘南藏族自治州:合作市

人口9万人。チベット族多数。市内に入る手前に、武装警察のバリケードあり。市内には9層の安多合作米拉日巴仏閣があった。その5層には本尊の裏側に、ツォンカバ(ゲルク派の始祖)とダライ・ラマ14世、パンチェン・ラマの金の仏像があった。この立派な仏閣は文化大革命のときに破却され、1988年に再建されたもの。ここの僧侶も3月時点で、他寺院などに移動させられているという。3月17日には小競り合いがあったという。

#### 甘肅省甘南藏族自治州:碌曲県

町中に入る手前に武装警察のバリケードあり。3月16日に、チベット族1000人余りが暴動。警察が鎮圧。死者2人。

#### 甘肅省甘南藏族自治州:瑪曲県

町中に入る手前に武装警察のバリケードあり。町中心部に武装警察が3000人駐在、軍用トラック10数台が並び、全中国の競馬の中心で、毎年の大会にはモンゴル人やウイグル人も集まる。3月16日には、50代の女性がダライ・ラマの写真掲げて道路を単身で行進し始め、それに僧侶や学生が参加したため、1万人規模のデモとなる。武装警察も1万人余が出動し鎮圧。死者2名。なおこの町の近辺に金山があり、広州からきた漢族が経営し結構儲けているという。政府直営の金山もある。



#### 甘肅省甘南藏族自治州:郎木寺鎮

道路に武装警察のバリケードあり。ラマ教の郎木寺あり。

#### 四川省阿壩藏族自治州:若尔蓋県

道路に武装警察のバリケードあり。人口7万人。ラマ教サキャ派の達扎寺あり。

#### 四川省阿壩藏族自治州:紅原県

道路にバリケードあり。町中に武装警察が駐在。軍用トラック10台以上。

#### 四川省阿壩藏族自治州:阿壩県

道路にバリケードで厳重検査。町中の主要ホテル(5軒ほど)を武装警察が借り上げ宿泊しており、一般人が泊まるホテルなし。かろうじて招待所クラス(バス・トイレ、暖房なし、洗面所は戸外で共有)があったので、私はそこに泊まった。町の西のはずれに格爾登寺には、暴動前は3000人ほどの僧侶がいたが、暴動後強制的に各所に移動させられ、寺内の大経殿には僧侶を含めて人影は少ない。寺の前に厳重なバリケードがあり、武警10人余が厳重警戒中。

マスコミ報道では、3月16・17の両日に大規模な暴動があり、銀行・大型スーパー・ガソリンスタンドなどが焼き打ちにされたため、鎮圧に武装警察数千人が投入され、暴動側に死傷者多数、警察側に死者2名と、伝えられていた。私が町中の人々から聞き取り調査を行ったところ、暴動参加者は1万人に及び、死者は20名以上、行方不明者多数。ただし銀行などの破壊・略奪行為はなく、日ごろから評判の悪かった悪徳漢族商店が1軒、それに公安の建物が焼打ちにあったのだという。公安の建物の前面にあった店のシャッターには、公安が暴動参加者に向けて撃ったというたくさんの銃痕がはつき

り残っていた。なおその店主は、目の前で11人が銃弾に倒れたと語った。多くの店が休業中であり、町中の至るところに連絡先や移転通知の張り紙がしてあった。

## 2. 長征とチベット族

08年3月のチベット暴動以来、チベット問題に関して多くの本が出版された。しかしそれらはチベットと中国の関係について、清朝末期あるいは中華民国時代を詳述し、そこから一気に中華人民共和国建国後つまり1950年代の描写に移ってしまっている。ほとんどの著作が、1935年、毛沢東率いる労農紅軍が四川省のチベット族地域を通過し、そのときチベット族との間にかなりの戦闘があったことについては言及していない。私は共産党とチベット族の問題を語るとき、この長征中の両者の関係を看過してはならないと考えた。

なぜならば長征の3大難所と言われた大渡河・大雪山・大湿原は、いずれもチベット族の居住地域と重なっており、しかも労農紅軍はその難行軍の間に、チベット族の執拗な攻撃に悩まされたからである。岡本隆三著「長征」には、P.149～251のわずか100ページの間に、労農紅軍第1方面軍とチベット族との戦闘場面が10か所、また第2・4方面軍についても4か所が記されている。以下にその一部を紹介しておく。

- ・「この山(大雪山)を越えたが、途中いたところで待ち伏せしているチベット族の闇討ちに苦しめられた」
- ・「長板山を越えるとき、紅軍は二手に分かれた。主力は右翼、第1軍団第6連隊が左翼になって進んだ。ところが第6連隊は壊口で精悍なチベット騎兵にはばまれ、大損害を出して引き返す途中、食料が尽き、連帯の3分の1におよぶ餓死者と凍死者を出して全滅の危機にさらされた」
- ・「チベット族は巧みに潜伏して、紅軍を闇討ちした。ゲリラ戦は得意の毛沢東も、チベット族の分散ゲリラには舌をまき、恐怖を感じた。紅軍はアブのような攻撃に苦しめられた。1匹の羊を手に入れるのに1人の紅軍兵を犠牲にしなければならなかった」
- ・「莫牙寺まで7キロ余りのところに近づいたとき、白竜河対岸の山からチベット族が一斉射撃を加えてきた。この1日だけで負傷したり、射殺されたり、落伍して殺された紅軍兵士の数は百数十人を下らなかった」
- ・「チベット地区はどこも敵視の世界だった」

長征中にチベット族との間に戦闘があったことは事実である。最新の研究では、黒水河の周辺だけでも、約1か月間の駐留中に80数回に及ぶチベット族との戦闘が行われていることが判明している。しかも長征中、労農紅軍がチベット族地域を通過した日数は92日間に及び、長征全体の25%を占めており、大雪山や大湿原の難行軍の記憶と同時に、日夜攻撃を仕掛けてくるチベット族への報復意識が、労農紅軍＝共産党の脳裏にしっかり焼きついたにちがいない。

上記のような視点から、私は昨年3月のチベット暴動が起きたとき、長征中にチベット族が労農紅軍を攻撃したことが、共産党の中に怨念となって残り、その後の共産党のチベット族弾圧につながったと考え、それを主張した。長征中、チベット族が他の少数民族のように労農紅軍と友好的協力関係を築き、攻撃をしていなければ、その後の両者の展開はもっと違ったものになっていたに違いないと考えたからである。いわば今回の暴動は過去の歴史における怨念の応酬に一因があると思ったからである。

しかしながら私は長征研究を進めていく間に、新たに西路軍問題(労農紅軍は1936年11月に西路軍を編成し河西回廊を西進、少数民族の回族と激戦し壊滅した)を詳しく知ることができた。さらに私は先回の小論で回族をウイグル族と間違えて書き、多くの皆さんからのご叱正をいただいたこともあって、08年11月、この西路軍の戦闘跡を1週間かけて踏破し、直接調査をした。そこでわかったことは、現在、回族と共産党政府の間にはあつれきがほとんどないということであった。両者の間に激戦があり、労農紅軍(西路軍)が壊滅し、2千人におよぶ女性部隊が惨殺されたり、奴隷として売り飛ばされたりしたにもかかわらず、現在回族には暴動の兆しはなく、両者の間には怨念の応酬のかけらも見出せなかった。この現実から、私は怨念の応酬がチベット暴動の大きな要因ではないと考えるに至った。ここに怨念の応酬説は取り下げることにする。

## 3. 長征への新視点

08年10月、私は毛児蓋から哈達鋪までの労農紅軍の行軍経路を歩いてみた。この間には長征最大の難所と呼ばれた大湿原がある。私は紅原や若尔蓋などの数か所で、車を降りて自分の足で大湿原を歩き回ってみたが、意外にも紅軍兵士たちの多数が落ち込んだという底なし沼のようなところは見当たらなかった。地球温暖化の影響で湿原が干上がったのかと思うほどであった。私は第4方面(左路)軍が3度通り大損害を被ったという大湿原の悲劇の場所で、しばしたた





ずみ長征を再考した。

### 湿原踏破にはもっと工夫が必要だったのではないか。

労農紅軍は毛児蓋から若尔蓋を経て巴西まで大湿原を踏破した。このときの戦況を岡本隆三の前掲書は次のように記述している。「紅軍は依然として追われる身であった。岷江の流れに沿って胡宗南・劉湘の四川軍が北部と東部をふさぎ、楊森・劉文輝の四川軍は懋功から追い上げ、江西中央根拠地からずっと追ってきた直系の薛岳・周渾元縦隊がさらにその南方の天全、雅安一帯で大渡河を背に陣をしいていた。蒋介石は紅軍が四川の東へ出てくることはあっても、よもやあの恐るべき無人の湿地帯をこえて北進し陝西、甘肅へ出ることはあるまい、湿地帯へはいったらふたたび満足な体で出てはこれまいと考えた。紅軍はその湿地帯にはいつて死中に活を求めようとしたのである」



毛沢東はその大湿地帯に踏み込み、ここでも見事に蒋介石の裏をかき、その追撃を振り切った。確かに、敵の裏をかく毛沢東の戦術は見事である。毛沢東はほんの数か月前にも、うまく蒋介石の裏をかき口口族(イー族の中の1部族)地域を無傷で突破した。このときも蒋介石は、まさか紅軍が危険極まりない口口族地域を通るとは思っていなかったので、その地がまったく無警戒であったため、毛沢東と紅軍は無事通過できたのである。

しかし口口族地域の突破ではほとんど損害がなかったのに比べて、大湿原の通過には多大の犠牲が払われた。犠牲者の多さという点から考えた場合、私はこの大湿原突破が名戦術であったと評価するには無理があると思う。毛沢東は大湿原に入る前に、毛児蓋にほぼ1か月間滞在している。私ならばこの間で、大湿原を渡るために竹や木ではしごみたいなものを作るなど、準備を整える。実際に牛や羊を通すためには木を十字に組み、浮き草の上に渡したという記録もある。なぜ大湿原に準備なしで踏み込み、大量の兵士を底なし沼に沈ませ、あるいは湿気と冷気で病死させてしまったのであろうか。この毛沢東戦術は私には不可解である。

### 長征は下作であった。

孫子を持ち出すまでもなく、兵法では「戦わずして勝つ」のが上策である。古来、リーダーたちはそのために権謀術策を繰り出してきた。また兵力の損耗を少なくするために、名誉をかなぐり捨てて撤退した例も少なくない。いずれにしても兵力を大幅に減らすのは下作であり、その下作を繰り返すリーダーを戦略・戦術の大家とはいわない。長征での兵士の損耗は甚大であった。最新の研究では下記のようにになっている。

長征へ開始前と終了後(西路軍を含む)の兵員数の比較

	開始前	途中補充人員	終了後
第1方面軍	86,000人	10,000～30,000人	7,000人
第2方面軍	14,000人	4,000人	11,000人
第4方面軍	80,000人		14,000人 (西路軍以前は37,000人)
第25軍	2,700人	5,000人	3,000人
合計	182,700人	19,000～39,000人	35,000人

長征の結果、生き残った兵士は、35,000人であり、途中で補充した人数を開始前の人数に加算すると、それは17%ほどとなってしまった。毛沢東が直接率いた第1方面軍の生存率は7%ほどである。もちろん減った人数は死傷者ではなく落伍者であり、それぞれの地に共産主義思想を根付かせるのに役立ったと強弁することもできる。しかしながら辺境の地で怪我をして落伍した兵士の多くは餓死したであろうし、執拗な国民党の追撃の手をかわして生き延びたものが多いとは考え難い。したがって兵法の視点から長征を考えた場合、兵力を大幅に減らしたこの逃亡作戦は下作であり、それを指導した毛沢東は戦略・戦術の大家であるとはいえない。しかしながら多大な犠牲を払いながらも、毛沢東は長征の結果、陝西省にたどりつき、そこで根拠地を作りしごとく生き残って、運よく革命を成功させた。この結果としての成功が、毛沢東を戦略・戦術の大家に仕立て上げてしまったと考えるのが妥当なのではないだろうか。

### 毛沢東にも長征の目的地がわからなかった。

原則として戦略や戦術には目的や目標が不可欠である。それがな



ければ兵士意思を統一して勝利に導くことはできないからである。その視点からすれば、長征は原則に反している。毛沢東は1934年10月、江西中央根拠地を出るとき、その目的や目標とする目的地を明示することができなかった。もちろん隠密行動であったため、ほぼ全員に目的地を秘匿しなければならなかった。しかしそれは秘匿したのではなく、示すことができなかったのである。紅軍はとにかく逃げ、どこかに次の根拠地を探すことに全力を尽くしたのである。このような逃避行、つまり目的・目標の明確でない撤退作戦は上策とはいえない。

一般には長征の目的は、北上抗日であったといわれている。しかしながら、陝西省に根拠地を作ることは当初の戦略ではなく、毛沢東は四川省に根拠地を構えることを漠然と考えていただけである。毛沢東と紅軍は偶然、陝西省に流れ着いたのである。最近の長征研究では、このことが明白になっている。

長征の目的地が明確でなかったために、大湿原通過前後に紅軍の間で大きな分裂騒動があった。巴西と俄界の間で、第1方面軍を中心とする右路軍と第4方面軍を中心とする左路軍の間で衝突騒ぎがあったのである。張国燾らに北上抗日を納得させられなかった毛沢東は、衝突を避けるためにあわてて逃げたという。そのとき毛沢東自身も北上を主張するだけで自分もどこに行ってもいいかわからなかったのである。とにかく毛沢東は腊子口の激戦を経て、哈達鋪に着いた。その郵便局で偶然に新聞を見て、陝西省の劉志丹の根拠地を知った。毛沢東は窮地に一生を得た思いで、その根拠地に行くことを決定したのである。このことは歴史的事実として公認されており、哈達鋪の現場には当時の郵便局がそのまま保存されており、壁には当時の新聞が飾られている。そして毛沢東がこの新聞を見て初めて、長征の目的地を明確に示したと、堂々と解説されていた。

毛沢東は劉志丹に助けられたのである。しかも新聞を見たのは偶然である。したがって偶然が毛沢東を救ったのである。目的や目標のない戦いに兵士を参加させるのは、上策ではない。冷静に振り返ってみれば、目的や目標が明確でない逃避行を指導した毛沢東は戦略・戦術の大家であるとはいえない。

#### 毛沢東は戦略・戦術に長じていたのか。

腊子口では林彪が激戦を陣頭指揮し勝ち抜いた。遵義では婁山関路を彭德懷が制した。金沙江渡河作戦では劉伯承が1週間寝ずに奮闘した。イー族(ロロ族)地域を通過するときも劉伯承が小葉丹と義兄弟の契りを結んで切り抜けた。大渡河では劉伯承指揮の下、楊成武が橋を制した。かたや毛沢東は赤水では最高の戦術展開を見せたが、それ以外の地では彭德懷や林彪、劉伯承などが極めて勇敢かつ上手に戦った。戦争上手つまり戦術面で優秀だったのは彼らであった。毛沢東は個々の戦術面では必ずしも優秀だったわけではない。



しからば戦略面においては毛沢東は優秀だったのか。1972年10月、毛沢東は訪中していた田中角栄首相に、「貴方たちには功労がある。貴方たちが侵略戦争を起こさなかったら中国共産党は強大にはなれなかった。蒋介石を打ち負かし政権を奪取することもできなかった」と語った。つまり毛沢東は当時、拡大してきた日中戦争を利用して政権を奪取したと言っているのである。長征で逃げまくり、たどり着いた陝西省で生き残っている間に、日中戦争が拡大し毛沢東に運が向いてきたのである。毛沢東本人もそれを十分承知していたので、田中角栄首相に上述のような話をしたのである。陝西省に雌伏する戦略は、いわば偶然の産物であったのである。したがって長征を見る限り、毛沢東が戦略・戦術に長じていたとはいえない。

念のために付け加えさせていただくが、私はかつての日中戦争を日本の侵略戦争であったと認識しているし、それに寛容な姿勢を示してくれた毛沢東に敬意を抱いている者の一人である。

#### 長征は熾烈な指導権争いでもあった。

一般に毛沢東の指導権は遵義会議で確立したといわれてきた。しかしながら最近の長征研究の結果では、そこで必ずしも毛沢東路線が確立したわけではなく、その後も指導権争いが続いた。遵義会議後、林彪は毛沢東の戦術に疑問を呈し、彭德懷に指揮を執るように要請し各将軍に根回しをした。それを察知した毛沢東は会理で政治局拡大会議を開き、この動きを封じた。また四川省懋功で第1方面軍と第4方面軍が合流してからも、その後約1年半にわたって張国燾との間で熾烈な指導権争いが繰り返された。つまり長征は遵義会議後も1枚岩ではなく、熾烈な権力闘争を伴いながら進行的なものである。

#### 長征と毛沢東のカリスマ化は後世になにをもたらしたのか。



毛沢東は延安で自ら長征を振り返り、次のように語っている。岡本隆三氏の前掲著から。

「長征はどんな意義をもつものであろうか。われわれは言う。長征は歴史の記録にあらわれた最初のものであり、長征は宣言書であり、長征は宣伝隊であり、長征は種まき機であると。盤古(天地万物の祖)が天地を開いたときから三皇五帝(漢民族最初の指導者といわれる伝説的人物)を経て今日までの歴史において、われわれのこのような遠征が、かつてあったであろうか。12か月のあいだ、空では毎日数十機の飛行機が偵察、爆撃を行い、地上では数十万の大軍が包囲、追撃し、行方をさえぎり、途中では言葉で言い尽くせぬ困難や妨害にぶつかった。それにもかかわらず、われわれは2本の足で、2万5千華里(12,500km)を踏破し、11の省を縦横に移動した。歴史上、かつて、われわれのこのような遠征の行われたことがあったであろうか。なかった。いままでにはなかった」

しかし実際の長征はそのようなものではなく、甚大な損害を伴う逃避行であり、味方陣営の中でも醜い指導権争いが繰り返し行われたのである。中には西路軍のように壊滅した部隊もあった。それにもかかわらず、逃避行が長征と表現され、さして戦略・戦術に長じていたとはいえない毛沢東がその大家にまつりあげられた。しかも多くの兵士を犠牲にして生き残った彼が、偶然の僥倖で天下を取った結果、カリスマ化された。その後、毛沢東は自己のカリスマ性を利用して文化大革命を引き起こし、長征とともに戦った同志の多くを葬り去った。しかもこの文化大革命は中国経済を停滞させた。

果たして毛沢東のカリスマ化は、中国人民にとってよい結果をもたらしたのだろうか。後世になにをもたらしたのだろうか。その他の政治手段はなかったのだろうか。これは私の今後の研究課題でもある。

#### 4. 上海での西藏展

甘肅省蘭州市から上海に戻って新聞を読んでいたら、市内で開催中の「西藏今昔大型图片展」の広告が目に入った。翌日さっそく足を運んでみた。会場にはきれいなパネルがたくさん張られており、チベットのことをわかりやすく紹介されていた。もちろんチベット開放前の農奴時代の悲惨な生活と、現在の豊かになった生活が対比された展示となっていた。きれいな小冊子も無料で配布されていた。参加者はちらほらだった。大西広教授の話によれば、北京五輪前に同様の展示会が北京で行われていたという。2010年に万博を控えた上海でも、チベット族との融和をはかるために、このような企画が行われたのであろう。ちなみに主催は中共上海市統戦部・新華社上海分社であり、共催は中国東方航空集团公司・中国移动通信集团上海有限公司であった。



以上